

## SMGLレポート3010

有事のルール[賢者が学ぶ歴史とは…]

[迫り来る法改正と時代変化の荒波-56]

●このところ、世界各地で起きている或いは権力者によって惹き起されている様々な出来事から、何をどう読み取ったらよいのか、正直途方に暮れる事があります。20世紀の終幕とともに、最早読み直す必要もその機会も更々ない**無用の長物**として、屑籠に放り込んでいた**一幕目の台本を、もう一度拾い上げて読み返す**事になろうとは、誰も考えていなかったのではないのでしょうか？役割を終え、とっくに消え去っているとばかり思っていた過去の亡霊が、実は**オンブお化け**のように、背中に張り付いていたのに気付かなかっただけだとしても、**何百年も前の中世の昔話に出てくる様な剣呑なストーリーが、藪から棒にいきなり目の前に突きつけられたり、**今や死語と化しているのではないかとすら思われていた**人種差別や民族差別、優生思想等が、平然と語られ始める**一方、二度と戦争を起こさないと宣言した上で構築されてきた**戦後日本社会**の基盤に杭が打ち込まれ、**軍事国家化の様相**を日増しに高める等、私達が同じ過ちを二度と繰り返さない為に教訓として学び、予防対策も講じてきた筈の**悪しき先例＝歴史＝が、黒い影のようにムクリと立ち上がってきた**かの様な不気味さを感じます。●「歴史は繰り返す」とも言いますが、たとえば、凄惨な出来事が積み重なり、実態を描く事は到底できない為、政権が変わる都度、前代までの事実関係を覆い隠し、塗りつぶし続けてきたのではないかと云われる中国。秦の始皇帝の頃から、共産党一党独裁の今日まで、その体質に変化はないという論者もいます。近現代においても、チベットに対する弾圧は広く知られている処であり、真相は分からないものの犠牲者の数は数百万人規模に及ぶという話も漏れ伝わってきます。けれども事が、国や民族の特性で生じたものかと云えば、決してそうではありません。ポルポト政権下のカンボジアでも、クメールルージュによる知識人等への弾圧・虐殺(映画「キリングフィールド」で、その様子が詳しく描かれている)が横行、百万人に達する犠牲者が出ています。また当然の事ながら、日本だけ、日本人だけが例外という事はあり得ません。勇猛果敢で知られた台湾(当時は日本の植民地)の高雄族は、その勇猛さゆえ最前線に立たされ犠牲となった者も数多いといわれ、沖縄戦では、現地の人々が楯にされ、或いは日本軍からの虐待を受け犠牲になったという話も伝わっています。いざとなれば同胞も見捨てかねないという気質が、日本人にも内在しているのは確かです。満州開拓団を置き去りにして我先に逃げ出した関東軍や、自分もすぐに君達の後を追って出撃するといいつつ特攻機を送り出し、さっさと内地に帰還した軍将校等、枚挙に暇がありません。●たとえ賢者揃いではなくとも、人間は愚者ばかりではない—とりたいのですが、残念ながら、この世界を取り仕切る、その**多くが独裁者であるリーダー達には理性と知性が欠けている**—と思われる節が多々あります。そもそも理性や知性があれば、リーダー＝権力者＝にはならず又なれず、学者や研究職になるのが妥当な落とし処—。その様に思考を巡らせて行くと、「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」というときの「歴史」と、我々が「世界史」「日本史」として理解しているそれとは、その意味合いが本質的に別物なのではないか、という事に遅まきながら気付かされます。よくよく考えてみると、この様な事実があり、それがどういうプロセスを経てしかるべく決着したか—を物語っているものを歴史と呼ぶのであれば、それは生き残った者＝勝者＝のものでしかなく、敗者(たとえば農民一揆を起こし、敗れ去った者達)の記録は、残されようがないからです。**敗者に歴史がない以上、賢者が学ぶ歴史というのは、結局、勝者＝勝ち残った者或いはその方程式＝という陳腐な結論に至る他ありません。**